



湧いてくる疑念

個人情報に関わると、知ること自体、悪にしてしまう。悪は使い方であって、内容ではない。しかし、個人情報に触ると、ことごとく悪のように言われてしまう。追求する側も応える側も、その発言で黙ってしまう。正常でないことが蔓延している。

例えば、年収である。年収は年毎に変わる。そのフォローアップは必要なことである。すなわち、営業社員の年収と当該企業の商品売上動向は大いに連関性がある。だとしたら、営業社員の年収情報のアップデートは必須になる。

然るに、それを止めるのが個人情報保護法だというのは、おかしくないか。最近では、年収のアップデート情報は、どうするのか尋ねることにしている。アップデートしているのか。そもそも、集めなくなったのか。アップデートは諦めたのか、別の方法を考えたのか、である。

コンピュータに詳しいだけのヒトと、詳しくないヒトと、データが大切だと言うだけのヒトと、コンピュータ活用を実行しているヒトがいる。データを仕事に使っているながら、そのデータがよく分かっていないというのも驚きだ。

個人データについて、個人が無知なのは仕方がないとして、国、役人までが無知なのは驚かされる。

筆者は、ひとつのデータベースを語ろうとしているが、通じるだろうか、という疑念が湧いてきたことがある。

個人データひとつとっても、いろいろある。組織が違えば、必要な内容も違ってくる。それはデータベースの作り方であって、同じ組織内なら、同じものであるべきだとするかどうかの判断もしっかりと確立されていないケースもある。

ひとつのデータベース

とにかく、難しいことだとされる事情があるのだ。原則論的には、組織内にひとつのデータベースが存在すれば、あらゆるアプリケーション業務処理に対応できるとされながら、現実論的には、個別のアプリケーションシステム対応に四苦八苦しているケースが多々ある。

だからからこそ、組織全体のシステムポリシー／対応基本方針を明確にすべきなのだが、それも、言うほど簡単ではないようだ。

システム部門の周辺には、間断なく、次々と新しいシステム機器が提案され、それらの導入がオファーされ続けている。しかも、いずれの新システム製品の性能も向上されており、あたかもそれらの新規導入すなわちシステム対応能力が向上されるものと短絡的に洗脳するようなベンダー側の誘惑に溢れている。

それらの新システム製品への対応もしなければならぬ一方、他方には、古典的なシステム（レガシーシステム）が存在していて、その対応にも苦慮している。

コンピュータが変わっても、使い切る手数は変わらない。そんな無理難題も、いずれは解決できる時が来ると期待しながらも。

データからのアプローチの可能性は、ランダムアクセスを実現したディスクシステムの登場で一気に高まったと言える。今でこそ当たり前のことだが、ランダムアクセスが可能になり、こういうアプリが可能になった、こういうことが出来るようになったという従前では夢のような発想が生まれたことを強調しておきたい。

後付けでなら、いくらでも言える。何とでも言える。分からないから出来ない。新しく発表されたシステム機器を何の反省もなく使ったいたヒトは沢山いる。ディスクシステムが登場して、その効果に気づいたヒトもいた。

個人情報データベースの対象を日本人に限っても、年に百万人前後の生き死にがある。住所変更にいたっては、年に数百万にも及ぶ。

改めて言うまでもなく、モノ（変更も含む）に関する情報／データベースは、もっと激しい。カネの移動も然り、それ以上である。

それらのすべての情報／データ変更をフォローする必要がある。これこそが、情報システムメンテナンスの要諦である。

それは、公的なシステムだけでなく、私的なシステムでも共通して指摘できることである。これが情報システムの大変さである。メンテナンスの大変さである。それがきちんと出来ていないと、他のデータベースとの統合など、夢のまた夢となる。

コンピュータ化すれば、紙が減る／なくなると言われた時代があった。ディスプレイ時代でないと、それは不可能だというキャッチコピーが溢れた時代でもあった。

コンピュータシステムのアウトプットは、当初はすべて紙であった。その紙をなくす、減らす、というのは分かる。現にコンピュータシステムのアウトプットは、今で

は紙に代わり、ディスプレイシステムになっている。

歴史は繰り返す

それと一連のコンピュータ化とデータの台帳化は別である。コンピュータ化は、データの扱いを変えた。特に、ディスクシステム化とは、台帳化の別の呼称でもある。

台帳をなくし、すべてを伝票データ化の宣伝は大間違いで、正解には、必要な情報が使い易くする、である。ディスクの用法に、当初のシステム部員が戸惑ったのも、ディスクの意味が分からなかったからで、意味が分かり、その出現を待っていたら向き合う態度も変わっていただろう。待っていただけでは、事態は変わらなかった。

システム屋は、システムに限らず、ひとつのやり方に凝り固まってしまう傾向がある。素人は、出来る出来ないではなく、したいことが出来るか、どうかで決める。

素人とは、専門家ではないとの意味だけでなく、自分の仕事から物事を見ようとするからである。

引き換え、コンピュータの専門家は素人の発想に悩まされる。よくあることだが、ここでも出来ない理由の羅列がなされる。常にシステム屋は、コンピュータから発想するのである。素人は、必要な情報から発想する。この違いが、実に大きい。

一方に、素人から見るシステムがあり、また、ユーザーから見たら現業の素人であるシステム屋がいるのである。実際、システム屋は、現業を知らない。

知らない者同士では、まとまるものもまとまらない。そこで、素人がシステム作りをする。専門家が想像もつかないものを作り出す。それがデータベースである。データベース作りである。検索システムである。巷間席卷するシステム、巷間使われているシステムは、プロが発想して出来るシステムではない、という指摘もある。

筆者の感覚では、今話題のマイナンバーカードは、システム要素のひとつである。問題はそれを活用し、裏打ちするアプリケーション業務プログラムの不在である(らしい)。筆者にはそう見える。マイナンバーを完成度を持ったシステムに仕立て上げなければ、システムにならない。詳細については筆者にも理解不能なところだが、古い発想で始めたのなら「さもありなん」と納得できる。

「データ／情報」中心

伝統的なタイプのシステム開発は、アプリケーションの要件確定から始まり、必要なデータ収集で完結する。コンピュータや周辺機器の発達と、システムとの関係、アプリケーションとの関係のあるべき姿の想像が出来ていないと、完成は難しい。その発想欠如が、以後の問題を複雑にする。

伝統的なシステム作りのプロセスは、要求定義、システムの概要設計／詳細設計、プログラムの概要設計／詳細プログラミングへと進む。合わせて、システム概要を決

め、必要なデータの収集、取り込みを考えていく。

この基本姿勢は今も変わっていない（はずである）。また、まずデータあり、情報ありき、であるのは言うまでもない。どのようにデータや情報にアプローチするかがアプリケーション業務システム開発の基本である。

データや情報が、コンピュータシステムの原点だという発想が、一番のポイントである。しかし、システム現場だけの常識に捉われたシステム専門家は、ややもすると目先のシステム要素だけに注目し、専心してしまう。

結果として、目標とする全体システム構築は完成しない。何兆円もの国家予算を投じながら未完成のままに終わってしまった住民基本台帳（住基台帳）システムが、その実例である。その反省も総括もないまま、今現在、マイナンバーカードシステム構想が進められている。住基台帳システムの二の舞ではないかと案じられる。

ユーザーの発想が正しいか、正しくないかの問題ではない。コンピュータの使い方の問題である。システムを中心にデータ、情報に置く、という発想が必要になる。

「マイナンバーありき」に不安

今にして思えば、筆者も、古式豊かな伝統的なシステムアプローチに染まっていたこともあった。その結果だろう。結果、つまりデータ、情報から出発とする発想に馴染めなかった。だから、近年の Google の行動を見て、仰天した。

Google の事業展開に、何時、どうやって、かかった費用を回収するのか、と他人事ながらに心配したものである。

だが、すぐに分かった。ヒトは、情報のあるところに集まる、である。ただ、それまで Google 社が耐えられるだろうか、である。その問題の解決にも時間はかからなかった。彼らの業績がそれを示している。人が集まった。業績は飛躍した。それで十分だったのだ。

メンテナンスは、システム本体とアプリケーションプログラムに対してするものである。もちろんデータのメンテナンス／アップデート（更新／修正）も含まれるし、既存のプログラム修正さらには新しいアプリケーションの追加開発である。

今さらながらだが、コンピュータ黎明期、コンピュータ価格が高かった時代、導入されたハードウェア機器の有効活用に専心するあまり、アプリケーション内容の脆弱さばかりが目立ったのも、一定程度は、やむ得ないことである。しかし、本質的な要諦が欠落していた点は、大いに反省し、今後の展開に活かしてもらいたい。

前述指摘したように、コロナ対策ワクチンの接種を前に、今話題になっているのがマイナンバーの強制活用論である。肝心の国民の存在よりも、マイナンバーカード制を優先する現政権政府のアプローチ方法に、かつての現場ユーザーの発想を軽視したシステム専門家の発想を彷彿する。国民健康を第一義にするはず施策を前に大いなる不安を感じる次第である。

（ FumioTAHARA ）